

オルゴールが鳴り止むまでに

登場人物

倉本一造	(66)	(36)	定年退職者
倉本紗江	(60)	(30)	一造の妻
倉本由里	(26)		一造の娘
倉本拓也	(21)		一造の息子
三井伸二	(29)		由里の彼氏
小泉桜	(21)		拓也の同期生
飯島洋太	(21)		〃
神使			神様の使い
神様			

○ビルの屋上（夜）

街並みを見下ろす神使（しんし）。

多くの人が行きかかっており、無数のネオンが街を照らす。

神使、立ち去る。

○図書館・キッズルーム

絵本を読み聞かせている倉本紗江（60）。

紗江の前には真奈（7）と隆史（7）が座っている。

隆史、つまらなそうな様子。

紗江「アイリスは、最後まで嘘をつかずに懸命に生きていきました」

紗江、絵本を閉じる。

真奈「いい子だね、アイリスは」

隆史「実際こんな奴いねーよ」

真奈「私は嘘ついたことないもん」

隆史「この間のテスト、ゴミ箱に捨ててたろ」

真奈「嘘はついてないもん」

隆史「一緒だよ」

真奈「うるさい！バカたっちゃん」

隆史「お前な・・・」

紗江「2人とも喧嘩しないの」

真奈「ねえ紗江さん、紗江さんは嘘ついたことある？」

紗江「私？私は・・・」

○倉本家・前の通り（夕）

子供たちがサッカーボールを蹴りながらはしゃいでいると、倉本一造（66）が玄関から出て来る。

一造「道でボールは蹴るなって言っただろ」

子供たちが「逃げろ」などと言い走り去って行く。

その様子を見ていた佐藤と田中がひそひそと話している。

佐藤「倉本さんまた怒ってる」

田中「怒るのが趣味だから」

一造、2人を睨みつける。

佐藤と田中、一造の視線に気づくと、
足早に去って行く。

一造「ろくな奴が住んでない」

一造、家に入ろうとすると倉本拓也（2

1）が中から出てくる。

拓也「また怒ってんの？」

一造「しょうもない奴ばかりだ」

拓也、去って行く。

一造「不愛想な奴だ」

○住宅街（夕）

紗江、歩いてると前からランニングし
ている石川（62）が来る。

石川「こんばんは」

紗江「最近よく走ってますね」

石川「ええ、おかげで体の調子が良いですよ」

紗江「羨ましい。私なんか走る気力も無いで
す」

石川「何言ってるんですか。人生100年時
代ですよ。私たちはこれからじゃないです

か」

紗江「そうですね。私も頑張らなくちゃ」

石川「まだまだ若い人には負けてられないで

すからね」

紗江「そうですね」

石川「もう少し走るんで、それじゃあ」

紗江「お気をつけて」

石川、走り去る。

○倉本家・リビング（夕）

一造、新聞を読んでいる。

紗江、リビングに入ってくる。

紗江「戻りました」

一造「ああ」

紗江「石川さんは凄いですね。また走ってま

したよ」

一造「どうせすぐ止めるに決まってる。禁煙も出来ない様な奴だ」

紗江「そんな感じはしなかったですよ」

一造「明日にはやめてる」

紗江「そうですかね」

○倉本家・玄関前（夜）

玄関前に立っている倉本由里（26）

頭にはキャラクターのカチューシャ。

手にはお土産の袋。

由里の前には停車した車。

運転席には三井伸二（29）

三井の頭にもキャラクターのカチュー

シャがついている。

由里「じゃあ明日だからね」

三井「大丈夫かな」

と、心配そうな表情を浮かべる。

由里「いっそのこと今日挨拶していきなよ」

三井「無理無理、心の準備も出来てないし。」

こんな格好だし」

由里「意気地なし」

三井「すいません」

由里、三井の頬をつねる。

三井「痛い」

由里、頬から手を離す。

由里「もうちょっと自信持って。こう見えても頼りにしてるんだから」

三井「分かった」

由里「おやすみ」

三井「おやすみ」

三井、運転席の窓を閉め、車を発進させる。

由里、去って行く車を見ている。

由里「大丈夫かな」

と言い、家の中に入って行く。

○同・リビング（夜）

一造と紗江、お茶を飲んでいる。

リビングの扉が開き、キャラクターのカチューシャをした由里が入ってくる。手にはお土産の袋。

由里「ただいま」

紗江「おかえりなさい」

由里「はい、お土産」

紗江「ありがとう」

紗江、由里の頭のカチューシャを見る。

紗江「それつけて帰ってきたの？」

由里「可愛いでしょ」

一造「いい歳して、恥ずかしくないのか」

由里「別にいいでしょ。私は何やろうが」

一造「後で笑われるのは俺達なんだ」

由里「誰にも見られてません。これでいいですか」

一造「父親に対してその態度は何だ」

由里「うるさいな。楽しかったのが台無し」

一造「お前な・・・」

紗江「2人ともやめて下さい。たまには仲良くしましょう」

由里「絶対無理」

由里、リビングから出て行こうとする
が立ち止まり

由里「そうだ、明日彼氏連れてくるから」

紗江「明日？」

由里「報告したいことがある」

紗江「お父さん、大丈夫ですか？」

一造「明日は予定がある」

紗江「何かありましたっけ？」

一造「色々だ」

由里「こっちとしては、その方がありがたいけど」

一造「どういう・・・」

由里、リビングから出て行く。

一造「本当にどうしようもないな。あいつは」

紗江「・・・」

○並木道

一造と紗江、歩いている。

周りには枯れた桜の木が並んでいる。

紗江「どんな人でしょうね？」

一造「どうせろくな奴じゃない」

紗江「由里が選んだ人です。きっと良い人で

すよ」

一造「どうだか」

紗江「報告したい事って結婚ですかね？」

一造「男連れてくるからそうなんだろ」

紗江「そうになったら家出て行くんですね」

一造「静かになっていい」

紗江「私は少し寂しいです」

紗江、立ち止まり桜の木を見る。

紗江「ここの桜もあと何回見れるんでしょう」

一造、桜の木を見る。

紗江「由里に子供が出来たら、みんなで来ま

しょうね。ここの桜を見るのが一年で一番

楽しみなんです。初孫に綺麗な桜見せてあ

げましょう」

一造「ああ」

○倉本家・リビング

一造と紗江、リビングに入ってくると、

神使が雑誌を読んでいる。

神使「おかえり」

一造「誰だお前」

神使「説明するから座って」

一造「警察だ」

紗江「はい」

紗江、固定電話の受話器を取る。

神使、指を鳴らす。

紗江、110番を押すが掛からない。

紗江「掛かりません」

一造、スマホを取り電話を掛けようとするが

一造「電源が入らないぞ」

紗江「誰か呼んできます」

紗江、リビングを出ようとする。

神使、人差し指を内側に曲げるとリビングのドアが閉まる。

紗江、ドアを開けようとするが開かない。
い。

紗江「ドアが開きません」

一造もドアを開けようとするが開かない。
い。

一造「どうなってる」

神使「説明するから座ってよ」

一造「誰なんだお前は」

神使「うーん、何て言ったらいいかな。俺たちは神使って言われてるんだけど、分かりますか」と、神に使える者」

紗江、ドアを開けようとする。

神使「だから開かないから。まず話聞いて」

一造「何しに来た」

神使「遠回しに言うのも面倒くさいから、率直に言うよ。倉本紗江、お前は一週間後に死ぬ。それを伝えに来た」

紗江「・・・」

一造「いい加減にしろ！警察に突き出してやる」

神使「まあ、信じられねーか。じゃあ1つだけ。近くに石川っておっさんいるでしょ。

あのおっさん、明日死ぬよ」

紗江、石川との会話を思い出す。

× × ×
(フラッシュユ)

石川「ええ、おかげで体の調子が良いですよ」

× × ×

紗江「そんなはずありません。最近は体の調子が良いって言ってました」

神使「でも死ぬよ」

紗江「・・・」

神使、壁にかかっているカレンダーを指差す。

一造と紗江、カレンダーを見る。

神使「一週間後の日曜日、これが最後の日」

一造「でたらめ言う・・・」

一造、神使を見ると消えている。

一造「消えた・・・」

紗江「・・・」

○ファミレス

由里と伸二、向かい合って座っている。

三井「緊張してきた」

由里「大丈夫だって。挨拶して食事してそれで

で終わり」

三井「そうなんだけどさ・・・」

由里「何て言うの？」

三井「え？」

由里「やっぱり、娘さんを僕に下さい？」

三井「今時言わないよ」

由里「私は結構好きだけどな」

三井「そう？」

由里「ねえ言ってよ」

三井「娘さんをとって？」

由里「うん」

三井「んー・・言えたら言う」

由里「楽しみ」

三井「言えたらだからね」

○倉本家・リビング（夕々夜）

一造、苛立った様子で座っている。

紗江、リビングに入ってくる。

紗江「警察の方、帰られましたよ」

一造「何だったんだあいつは」

紗江「本当に何だったんでしょうね。盗まれ

たものも無かったし・・」

一造「見つけたら、警察に突き出してやる」

紗江「・・・お父さん、とりあえず今日は忘れ
ましょう。由里のお付き合いされてる方も
来ますし」

一造、苛立っている。

× × ×

テーブルには料理が並んでいる。

一造、苛立った様子で座っている。

一造の隣には紗江。

向かいに由里と三井が座っている。

三井「（小声で）怒ってる？」

由里、一造を睨む。

紗江「じゃあ食べましょうか」

三井「いただきます」

食べ始める4人。

紗江「お口に合いますか？」

三井「とても美味しいです」

紗江「良かった。おかわりもあるから言って

下さいね」

三井「ありがとうございます」

由里、冷奴に醤油をかける。

一造「醤油」

由里、一造の前に強めに醤油を置く。

一造「何だその態度は」

由里「それはそっちでしょ。何でそんなに怒ってんの。何かした？不満があるなら外で食べて」

一造「父親に向かってそんな口の利き方あるか！そもそもお前が報告したいことがあるって言うから、わざわざ会ってやってるんだろ」

由里「わざわざって何？そんな言い方ないでしょ。それに、私はお母さんに言ったの。お父さんには言ってない」

一造「お前な・・・」

紗江「2人ともやめて下さい。せっかく三井さんが来てくれたんです。楽しく食べましょう」

沈黙が流れる。

紗江「三井さんごめんなさい。これから結婚するっていうのに、これじゃあ不安になっ

ちやいますよね？」

三井「え？」

紗江「あっ、ごめんなさい。報告って言うから結婚かと思って」

三井、覚悟を決め

三井「お父さん、お母さん。娘さんを僕に・・・」

一造「俺たちはお前の親じゃない」

三井「え？あっ、そうですね。あの、おじさ・・・じゃなくて」

一造「おじさんとは何だ！」

三井「ごめんなさい。お父さん」

一造「だから、お父さんじゃない」

三井「すいません」

一造「ビシツとしろ」

三井「はい。じゃあ言わしていただきます。

お父さんを僕に下さい」

由里「お父さんを貰ってどうすんの」

三井「そうか、お母さんを・・・じゃなく」

一造「人の妻をくれとはどういうことだ」

三井「違うんです。間違いました。娘さんを

差し上げます」

一造「元々、俺たちの娘だ」

三井「そうですね。あの、えっと、結婚して下さい」

由里「何でお父さんを貰おうとするの？」

○ 駅までの道（夜）

由里と三井が歩いている。

三井、気落ちしている。

由里「もう最悪！あの頑固親父。家族の縁切ってやろうか」

三井「ごめん、俺のせいで・・・」

由里「何言ってるの、伸二は悪くない。あのバカ親父が悪い」

三井「完全に嫌われたね」

由里「完全に嫌われた」

三井「そんなはつきり言わなくても」

由里「でも言おうとしてくれたね。娘さんを見て」

三井「全然ダメだったけど」

由里「勇氣出して言おうとしてくれたこと嬉しかった。本当は言いたくなかったでしょ？」

三井「うん」

由里「あの頑固大魔王に言おうとしたんだから、もっと胸張って。普通は言えないんだから」

三井「もったかつこいいとこ見せたら良かったけど・・・」

由里「勇氣出したり、一生懸命やってる姿がいいんだから。それをダサいって言う人もいるけど、良い所しか見せない様な人の方がよっぽどダサい」

三井「・・・次は自分らしくやってみる」

由里「うん」

○倉本家・寢室（夜）

机と座椅子が置かれた和室。

中央には布団が2枚敷かれている。

一造、座椅子に座っている。

襖が開き紗江が入ってくる。

紗江「ものすごく怒ってましたよ。もう口を利かないって」

一造「・・・」

紗江「昼間のことですか？」

一造「あんなもの信じてない」

紗江「そうですね。石川さんが亡くなるとも思えないですし」

一造「ただの頭がおかしい奴だ」

紗江「そうなんですかね・・・」

一造「今日はもう寝る。そんなに気にするな」
一造、布団に入る。

紗江「・・・分かりました。おやすみなさい」

○倉本家・外観（朝）

T「月曜日」

○同・リビング（朝）

テーブルには4人分の食事。

一造と由里、淡々と朝食を食べている。

紗江、2人の様子を心配そうに見る。

拓也、リビングに入ってくる。

紗江「おはよう。今ご飯よそうから」

拓也「要らない」

拓也、自分の席のグラスを取り、お茶を入れて飲む。

紗江「それだけでいいの？」

拓也「うん」

拓也、リビングから出て行く。

○晃央大学・廊下

飯島洋太（21）が歩いていると、教室から声が聞こえてくる。

伊藤の声「どういうこと？」

洋太、こっそりと教室を覗き込む。

○同・教室

拓也と伊藤（21）が向かい合っている。

拓也「面倒くさくなった。それだけ」

伊藤「最低だね」

伊藤、洋太がいる反対のドアから出て行く。

洋太、去って行く伊藤の後ろ姿を見ている。

○同・構内

拓也、歩いていると後ろから洋太が走ってくる。

洋太「また女振ったろ」

拓也「何で知ってんの？」

洋太「何で振るんだよ。あの子可愛かったじゃない」

拓也「連絡とるのも、会うのも煩わしくなっただ。そんだけ」

洋太「好きでもないやつと付き合うからだろ。

そもそも何で付き合ったの？」

拓也「なんとなく」

洋太「そんなんだから別れるんだよ。恋愛伝道師の俺から言わせるとだな」

拓也「誰が恋愛伝道師だよ」

洋太「お前は異性じゃないと埋められない場所、とりあえず何かしら入れて空白を埋めてるだけ。腹が減ってるから食べるものを食ってる、そんな感じだ。だから満たしてくれる相手を探せ」

拓也「満たすって？」

洋太「そうだな・お前は優しくなれる相手がいい。ただし、女だから、好きだからじゃない、それ差し引いても優しくなれる相手だぞ」

拓也「そんな奴いねーよ」

洋太「いや、いる。日本のウーマンなめんじやねーぞ」

拓也「ウーマンって言うな」

洋太、鞆に付いている星のキーホルダーを外す。

洋太「これを其方に進呈しよう」

洋太、拓也の鞆に星のキーホルダーをつける。

洋太「これな、最高の女が寄ってくるって言われる伝説のキーホルダーだから、付けてたら良い相手見つけられるぞ」

拓也「ならお前が付けてた方がよくな」

洋太「・・・そういうところ直した方がいいぞ」

○住宅街

一造と紗江が歩いていると、佐藤が走ってくる。

佐藤「紗江さん、石川さんが亡くなったって」

紗江「え？」

佐藤「今朝倒れて、救急車で病院まで運ばれたみたいなんだけど、そしたらそのまま・・・」

一造と紗江、呆然としている。

○倉本家・リビング

一造と紗江、向かい合って座っている。

紗江「やっぱり昨日の人が言ってたこと・・・」

一造「たまたまだ。そんなことあるはずがない」

紗江「でも・・・」

一造「大丈夫だ。母さんはまだ死なない。あんな奴の言ったことなんて全部でたらめだ」

紗江、顔を落とす。

神使の声「だといいんだけど」

一造、振り向くと神使が立っている。

一造「お前」

立ち上がり神使の腕を掴む。

一造「警察に突き出してやる。母さん電話：」

と、紗江の方を見ると、驚いた顔をしている。

一造、ハツとなり振り返ると、神使の姿が消えている。

一造「どこ行った？」

紗江「急に消えました・・・」

神使の声「こっち」

一造と紗江、横を向くと神使の姿。

一造「どうなってる・・・」

神使「あんたらで言う魔法に近いのかな。映画とかで見るとでしょ？」

一造「お前は何者なんだ？」

神使「だから説明したじゃん」

紗江「昨日言ってたこと、本当なんですか？」

神使「おっさん死んだでしょ」

紗江「・・・」

神使「わざわざいつ死ぬかなんて言いに来ないんだけど、ある条件を満たすと死ぬ1週間前に告げることになってる」

紗江「条件？」

神使「そう」

紗江「何ですか、その条件って？」

神使「黒い嘘をついていないこと」

紗江「黒い嘘？」

神使「嘘には2種類ある。白い嘘と黒い嘘」

紗江「白と黒・・・」

神使「人の為についたりする嘘は白い嘘。人を傷つけるような嘘は黒い嘘。ここまで分かる？」

紗江「はい・・・」

神使「黒い嘘をついてない人間だけに、いつ

死ぬかを教えてる」

紗江「死ぬ日が決まってるんですか？」

神使「神がそれぞれに役割を与えてる。産まれてすぐに死ぬ子供は命の尊さを教えるため。100歳まで生きる人間は強さを教えるため。その役割を全うしてみんな死んでいく。まあ、すぐ亡くなったら教えることも出来ないんだけど」

紗江「私の役割って？」

神使「さあ、それは俺が決めることじゃないから」

一造「そんなの理不尽だろ。お前らの都合で勝手に殺されてたら、たまったもんじゃない」

神使「人間は争いが多すぎる。自分たちの欲で血を流し、力無き者に理不尽な制裁を加える。権力に不相応な者が頂点に立ち、間違った道に先導する。そして自らの価値観で作った正義を振りかざし、感情に流され人を傷つけていく。だから神は命に役割を

与え、死ぬ日を定めた。何故だか分かる？
人は犠牲がないと学ばないでしょ？綺麗ごと
だけじゃ変わらないんだよ」

紗江「・・・」

神使「じゃあ、残りの人生楽しんで。(カレン
ダーを指し)日曜までだから」

一造と紗江、カレンダーを見る。

再び神使を見ると姿が消えている。

○同・ベランダ(夜)

紗江、夜空を見上げている。

由里の声「お母さん・お母さん」

紗江、振り返るとパジャマ姿の由里。

由里「どうしたの？ぼーっとして」

紗江「ううん、何でもない」

由里「お風呂入っちゃいなよ」

紗江「うん」

由里、去ろうとする。

紗江「由里」

由里「何？」

紗江「・・・うん、何でもない」

由里「そう」

由里、去って行く。

紗江、再び夜空を見上げる。

○同・寝室（夜）

一造、思いつめた様子で座っていると、壁に掛けてあるコルクボードが目映る。

そこには由里と拓也の幼い頃の写真。

一造、コルクボードを眺める。

コルクボードの端に一枚の紙を見つける。

その紙を手にとると、クマのスタンプが3つ押されている。

○同・リビング

T「火曜日」

一造、新聞を読んでいる。

紗江、リビングに入ってくる。

紗江「回覧板届けに行ってくださいね」

一造「ああ」

紗江「帰って来てから散歩に行きましょう」

一造「ああ」

紗江「たまには届けてみます？」

一造「いい」

紗江「・・・そうですか」

紗江、リビングを出て行く。

一造、新聞を閉じる。

○並木道

一造と紗江、歩いている。

紗江、桜の木を見る。

紗江「もう一度見たかったんですけどね」

一造「・・・」

紗江「せめてあと一回・・・」

一造「由里と拓也には言わないのか」

紗江「考えたんですが、2人には言いません」

一造「何でだ？」

紗江「残された時間はいつもと同じく過ごし

たいんです。こうやってお父さんと散歩して、由里の愚痴聞いて、拓也の眠そうな顔見たりして・・・そういう些細な日常が好きなんです。残り少ない私には、いつもと変わらない日々が特別なんです」

一造、ポケットからクマのスタンプが3つ押された紙を取り出す。

一造「これ覚えてるか？」

○（回想）倉本家・玄関・30年前（夜）

紗江、玄関のドアを開けると、一造を抱えた佐々木（28）が立っている。

佐々木「倉本さん飲みすぎちゃって。家近いでここまで」

紗江「そうでしたか。こんな夜遅くに申し訳ありません」

紗江、一造の肩を抱える。

佐々木「中まで手伝います」

紗江「ありがとうございます」

○（回想）同・リビング・30年前（朝）

ソファ―に寝ている一造、目を覚ます。

一造「・・・」

紗江、リビングに入ってくる。

紗江「おはようございます」

一造「何でここに寝てるんだ？」

紗江「佐々木さんが、家まで送ってくれたんです」

一造「佐々木が？」

紗江「ええ、中まで運んでくれました」

一造、紗江の前で膝をつく。

一造「すまん紗江。お前に恥をかかした」

紗江「私はいいんです。それよりも佐々木さんにお礼を言って下さい」

一造「結婚した時に決めただ。お前に迷惑や恥はかせないって」

紗江「迷惑だなんて思ってます」

一造「いやダメだ。俺の気が済まない」

一造、サイドボードの中から紙とクマのスタンプを取り出し、紗江の前で紙

にスタンプを押す。

紗江「何ですか？」

一造「恥をかかせたり、迷惑をかけたらスタンプを1つ押す。1つにつき1個、何でも願う事を聞く」

紗江「そんなのいいですよ。私だって迷惑かけると思います」

一造「紗江はいいが、俺はダメだ。男が一度決めたことだから、二言は言わせないでくれ」

紗江「・・・分かりました」

○並木道

紗江、一造の持ってる紙を見ている。

一造「本当だったら3つだが、押してから何年も経ってる。だから利子付きで、10個でも20個でも言ってくれ」

紗江「さっきも言いましたけど、特別な事はいりません。いつもと同じでいいんです」
一造「ダメだ。男が一度やるって言ったんだ。」

約束を守れなかったら一生後悔する。これは自分の為でもあるんだ」

紗江「・・・分かりました。じゃあ3つだけお願いします」

一造「10個でも20個でもいいんだぞ」

紗江「1個で1つの願い事を叶えてくれるんですよね？スタンプは3つです。女が一度そう約束したんですから、二言は言わせないで下さい」

一造「・・・分かった」

紗江「決まったら言いますね」

一造「ああ」

○晃央大学・食堂

拓也と洋太、昼食をとっている。

洋太「知ってた？そこにあるプラネタリウム閉館するんだって」

拓也「へー」

洋太「行こうぜ」

拓也「1人で行けよ」

洋太「何でだよ」

拓也「男2人でプラネタリウムなんて見たくない」

洋太「何よ、拓也のバカ。どうせ他の女と行くんでしょ？」

拓也「うるせーな」

洋太「次の授業何？」

拓也「今日は終わり」

洋太「マジかよ。俺5限まであるよ」

拓也、食べ終わり立ち上がる。

洋太「帰るの？」

拓也「うん」

洋太「俺が終わるまで待っててよ」

拓也「やだ」

洋太「お前今日バイトだろ。まだ時間あるじゃない。一緒に日本の経済学ぼうぜ」

拓也「適当に時間潰す」

拓也、去る。

洋太「この薄情者め。肘ぶつけるとジーンてなる所ぶつける」

○同・廊下

拓也、歩いていると曲がり角で小泉桜
(21)とぶつかる。

桜「ごめんなさい」

と頭を下げた際に、リュックからノートや教科書が落ちる。

桜「あっ」

桜、落ちたものを拾う。

拓也も一緒になって拾う。

桜「すみません」

拓也、教科書を桜に渡す。

桜「ありがとうございます」

桜、ノートなどをリュックにしまい背負う。

桜「ご迷惑おかけして申し訳ありませんでした」

と再び頭を下げると、リュックからノートなどが落ちる。

桜・拓也「・・・」

○プラネタリウム・正面玄関

拓也、看板を見ている。

看板には上映時刻が書かれている。

○同・場内

拓也、入ってくる。

客は数人程度。

拓也が席に着くと照明が暗くなり上映が始まる。

× × ×

寝ている拓也。照明が明るくなり目を覚ます。

一番前に座っていた桜が泣きながら出て行く。

拓也、桜の後姿を見ている。

○同・待合室

桜、目に涙を浮かべながら写真を見ている。

写真には幼い頃の桜と母が写っている。

拓也の声「はい」

桜が振り返ると拓也がティッシュを差し出している。

桜「・・・」

拓也「こんなのしかないけど」

桜、急いで涙を拭い

桜「大丈夫です」

拓也「使って」

桜「ごめんなさい。大丈夫です」

とティッシュを受け取り、走り去っていく。

拓也「持ってくるのかよ」

○倉本家・リビング（夜）

紗江と由里、恋愛ドラマを見ている。

ドラマの中ではデートシーンが流れている。

由里「付き合いたたてのデートって楽しいよね」

紗江「今は楽しくないの？」

由里「今は今で楽しいけど、付き合いたては

違った楽しさがあるじゃん。それよりどう
なのお母さんは？」

紗江「え？」

由里「もう長いことデートなんてしてないで
しょ？」

紗江「そんなことない。今日もしました」

由里「散歩でしょ。それはデートに入らない」

紗江「そうなの？」

由里「たまにはどっか行ってくれば？」

紗江「・・・」

紗江、テレビを見ると手を繋いだ男女
が映っている。

○同・寝室（夜）

明かりの消えた寝室。

一造と紗江、布団に入っている。

紗江「1つ目の願い事が決まりました」

一造「何だ？」

紗江「デートしましょう」

一造「デート？」

紗江「はい」

一造「いつもしてるだろ」

紗江「散歩は入らないです」

一造「そうなのか？」

紗江「ええ」

一造「でもデートって何するんだ？」

紗江「まだ内緒です」

一造「・・・分かった」

紗江「ありがとうございます」

○同・リビング（朝）

T「水曜日」

一造、紗江、由里、食卓を囲む。

無言のまま食事をする一造と由里。

紗江、2人を心配そうに見ている。

○動物園・入り口

一造と紗江、チケットを持って園内に入っていく。

紗江「最後に来たのは拓也が小学生の頃です

よね」

一造「ああ」

紗江「楽しみですね」

一造「大人が来る場所じゃないだろ」

紗江「私は好きですよ。動物園」

紗江、嬉しそうに歩いていく。

一造、紗江を見て少し微笑む。

○同・園内

一造と紗江、サルを見ている。

紗江「可愛いですね」

一造「サルも人間も変わらんだろ」

紗江「あんなにお尻は赤くないですよ」

一造「ケツの色だけだ。あとは変わらん」

紗江「じゃあお父さんもサルですね」

一造「俺をあんなのと一緒にするな」

紗江「お父さんが一緒って言ったんですよ」

一造「それはあれだ・次行くぞ」

一造、歩き出す。

紗江、一造の後姿を見て微笑む。

× × ×

一造と紗江、ライオンを見ている。

紗江「強そうですね」

一造「ああ」

紗江「ライオンで野菜食べないんですかね？」

一造「食べないだろ」

紗江「健康に良くないですね」

一造「関係ないんじゃないか」

紗江「でも顔の色悪そうですね」

一造「元々ああいう色だ」

× × ×

一造と紗江、ナマケモノを見ている。

紗江「やる気なさそうですね」

一造「ああ」

紗江「拓也みたいです」

一造「こっちの方がやる気がある」

紗江「フフ、そうですね」

× × ×

一造と紗江、プレーリードッグを見ている。

紗江「ずっと食べてますね」

一造「ああ」

紗江「由里みたいです」

一造「こんなに可愛くない。あいつは・・・」

× × ×

一造と紗江、ゴリラを見ている。

一造「これだ」

紗江「怒ったらこんな顔になりますけど・・・」

一造「いつもこんな顔だろ」

○道・露店前

一造と紗江、歩いている。

紗江「楽しかったですね」

一造「ああ」

2人の前に露店が見える。

露店には画家が座って絵を売っている。

紗江、店の前で立ち止まり商品を見る。

画家「いらっしゃい」

海や空などが描かれた絵がいくつか置いてあり、すべての絵には空白の部分

ある。

紗江「綺麗な絵ですね」

画家「ありがとうございます」

紗江「この空白は何ですか？」

画家「絵を買ってくれた人に言葉を贈るんです」

紗江「言葉？」

画家「その人を見て私が感じた言葉を書くんです」

紗江「素敵ですね。一枚買っていいですか？」

画家「ええ、じゃあ好きな絵を選んで下さい」

紗江、少し悩んで空の絵を選ぶ。

紗江「これをお願いします」

紗江、選んだ絵を画家に渡す。

画家「言葉を書くので、少しお待ちください」

紗江「はい」

× × ×

一造と紗江、絵が出来上がるのを待っている。

画家「お待たせしました」

画家、絵を紗江に渡す。

紗江「ありがとうございます」

絵を見ると「曇り空から射す光のよう
にあなたの優しさは人の心を照らして
くれる」と書かれている。

紗江「素敵な言葉です・おいくらですか？」

画家「お代は結構です。趣味でやってるので」

紗江「いいんですか？こんなに素晴らしい絵
なのに」

画家「はい」

紗江「大事にします」

画家、優しく微笑む。

紗江「見て下さい。良い言葉頂きました」

紗江、一造に絵を見せる。

一造「ああ。良い言葉だ」

○晃央大学・教室

洋太、退屈そうに講義を聞いている。
隣には拓也。

洋太「この授業が人生で役に立つことなんて

あるのかね」

チャイムが鳴る。

洋太「お前、次何？」

拓也「これで終わり」

洋太「俺が終わるまで待っててよ」

拓也「帰る」

洋太「一緒に日本の経済盛り上げようぜ。ブ

ラザー」

拓也「ブラザーはやめろ」

桜の声「あ・・・」

振り返ると桜がティッシュを持って立

っている。

桜「これ」

桜、ティッシュを差し出す。

拓也「わざわざ返さなくていいよ」

桜「でも・・・」

拓也「あげる」

拓也、立ち去る。

洋太「拓也の彼女？」

桜、慌てふためきながら

桜「全然違います。友達ですらなくて、テイ
ツシュだけの関係です」
洋太「どういう関係？」

○ 駅・ホーム

桜、下を向きながら歩いている。
ふと前を見ると拓也がベンチに座って
スマホをいじっている。
すると、拓也が顔を上げ視線が合う。

桜「・・・どうも」

桜、気まずそうに立っている。

拓也「座れば」

桜、拓也から椅子を1個開けて座る。

拓也、再びスマホをいじり始める。

桜「・・・ティッシュありがとうございます」

拓也「うん」

沈黙が流れる。

拓也「よく行くの？」

桜「え？」

拓也「プラネタリウム」

桜「たまに」

拓也「そうなんだ」

再び沈黙。

桜「よく行くんですか？」

拓也「初めて行った。寝ちゃったけど」

桜「よく寝ている人います」

拓也「あそこつぶれるんだっけ？」

桜「そうみたいです」

拓也「客入ってなかったもんな」

桜「私が小さい時はもっといたんですけど」

拓也「そんな前から行ってたの？」

桜「毎年母が誕生日に連れてってくれて」

拓也「今年も一緒に行くの？」

桜「去年亡くなって、今年は1人で行きまし

た」

拓也、桜を見る。

拓也「そっか・ん？」

桜、拓也を見る。

拓也「じゃあ昨日誕生日だったの？」

桜「はい」

拓也「おめでどう」

桜「ありがとうございます」

拓也、鞆から星のキーホルダーを外し

桜に差し出す。

拓也「今あげれるのこんなしかないけど」

桜「そんな、申し訳ないです」

拓也「いいよ。大したものじゃないけど」

桜「・・ありがとうございます」

桜、キーホルダーを受け取るとじっと

眺めている。

拓也「要らなかった？」

桜「いえ、初めて貰ったので・・・」

拓也「初めて？」

桜「私が産まれてからすぐに父が亡くなって、

それから母が1人で育ててくれたんです。

あまりお金に余裕がなかったから、誕生日

は物じゃなくてプラネタリウムに連れてき

てもらってました」

拓也「毎年？」

桜「初めて行った時に私がすごい喜んだから、

それでたぶん・・」

拓也「・・・」

桜「だからちゃんと貰ったのは、これが初めてなんです」

拓也、キーホルダーを眺める桜の横顔
を見てる。

○映画館・場内

一造と紗江、座席に座っている。

紗江「映画館で見るの久しぶりですね」

一造「ああ」

紗江「由里がこの映画面白って言ってたから見たかったんですよ」

照明が暗くなっていく。

紗江「始まりますね」

× × ×

映画を見ている2人。

一造M「映画は下らないコメディだった。だけど内容などどうでもよかった」

一造、紗江を見ると笑っている。

一造 M 「母さんが楽しんでいる。それだけで
良い映画と言えるだろう」

紗江、一造を見て

紗江 「面白いですね」

一造 「ああ」

紗江、再びスクリーンを見て笑う。

○並木道（夕）

一造と紗江、歩いている。

紗江 「今日はありがとうございます」

一造 「ああ」

紗江 「いつも通りの日常でいいって言いまし
たけど、こういう特別な日も良いですね」

前から手を繋いだカップルが歩いて来
てすれ違う。

紗江、カップルの後姿をみてる。

一造 「どうした？」

紗江、一造の手を握る。

一造、驚いた様子で紗江を見る。

紗江 「たまには手を繋いで帰りましょう」

一造「近所のやつに見られるぞ」

紗江「いいじゃないですか。夫婦ですもの」

一造「でもな・・・」

紗江「ダメです。今日は私のわがまま聞いてもらいます」

一造、戸惑う。

紗江「行きましょう」

2人、歩き出す。

紗江「お父さん」

一造「何だ？」

紗江「2つ目のお願い言っていていいですか？」

一造「ああ」

紗江「由里と仲直りして下さい」

一造、紗江を見る。

紗江「由里がもうすぐ家を出て行きますよね。」

そうになったら会わなくなると思うんです。

そしたら他人と変わらないじゃないですか。

2人には家族でいてほしいんです」

一造「・・・」

紗江「私たちが家族になったのは意味がある

と思うんです。今はその意味が分かりませんが、お父さんがこれから見つけて下さい。きつと私が生きる意味もそこにあるんだと思います」

一造「・・・ああ」

○カフェ（夜）

拓也、店内の掃除をしている。

そこに多田がやって来る。

多田「あとやっとかから、今日はあがっちゃって」

拓也「はい」

○雑貨屋前の道（夜）

拓也、雑貨屋の前を歩いている。

ショーウィンドウを見ると、星が描かれたオルゴールを見つけ、立ち止まる。

拓也、オルゴールを眺めている。

○倉本家・リビング（夜）

一造、紗江、由里、食卓を囲む。

無言のまま食事が進んでいく。

一造、由里を見ると目が合う。

由里「何？」

一造「何でもない」

再び無言になる。

紗江「三井さん元気にしてる？」

由里「誰かさんのせいで元気じゃない」

一造「父親に向かって誰かさんとは何だ」

由里「お父さんのせいで元気じゃありません」

一造「お前なあ」

紗江「お父さん」

一造、一呼吸おいてから

一造「由里」

由里「何？」

一造「明日、飲みに行くぞ」

由里「は？」

一造「2人で飲みに行く」

由里「何でよ」

紗江「私からもお願い」

紗江、頭を下げる。

由里「ちよっと、やめてよ」

紗江「お願い」

由里「だからやめてよ」

一造、紗江を見ている。

○同・寝室（夜）

明かりの消えた寝室。

一造と紗江、布団に入っている。

一造「悪かったな、頭下げさせて」

紗江「私はいいんです。それよりも大丈夫で

すか？由里と2人で」

一造「何とかする」

紗江「会話って、キャッチボールって言うじ

ゃないですか」

一造「ああ」

紗江「お父さんと由里ってドッチボールにな

ってるんですよね」

一造「どういう意味だ」

紗江「お互いがぶつけあってます。相手が取

りやすい球を投げてみたらどうですか？」

一造「・・・」

紗江「私には優しい球を投げてくれるじゃないですか」

一造、考え込んでいる。

○同・リビング（朝）

T「木曜日」

一造、紗江、由里、食卓を囲んでいる。

一造と由里、目が合うが視線を逸らす。

再び、視線が合い逸らす。

しばらくして再び目が合う。

由里「何？」

一造「お前が見てくるからだろ」

由里「そっちが見てくるんですよ」

一造「お前が先に見たから見たんだ」

由里「そっちが先に見たから見たんです」

一造「お前が・・・」

紗江「お父さん」

一造「・・・あれだ、化粧のノリがいいな」

由里「まだしてないけど」

一造「・・・髪切ったか？」

由里「切ってないけど」

一造「今日は天気がいいな」

由里「どうしたの？おかしくない今日」

一造、立ち上がる。

一造「新聞取ってくる」

由里「そこにあるけど」

一造、テーブルにある新聞を見る。

一造「あれだ、隣の家の新聞」

由里「何で隣の家の新聞をお父さんが取って

くるのよ」

一造「渡してくる」

由里「自分で取るでしょ」

一造「たまには渡さないとダメだろ」

由里「気持ち悪いでしょ。急に来てお宅の新

聞ですって来られたら」

一造「それが近所付き合ってもんだ」

由里「聞いたことないけど」

一造「今日からだ」

一造、リビングを出る。

由里「何あれ？」

一造「お父さんなりの優しい球です」

由里「球？」

○晃央大学までの道（朝）

桜、歩いていると後ろから肩を叩かれる。

振り向くと拓也。

桜「あっ、昨日はありがとうございました」

拓也「これ」

拓也、紙袋を渡す。

桜「何ですか？」

拓也「誕生日プレゼント」

桜「昨日貰いましたよ」

拓也「貰うの初めてって知らなくて、あれが

初めてじゃ悪いから」

桜「2個も貰えませんか」

拓也「いや、貰って」

拓也、立ち去る。

桜、拓也の後姿を見ている。

○二谷商事・休憩室

由里と三井、座っている。

由里「（ため息をつく）」

三井、由里を見る。

由里「（深いため息をつく）」

三井、由里を見ている。

由里「（わざとらしくため息をつく）」

三井「どうしたの？」

由里「今日ね、お父さんと飲みに行くの」

三井「2人で？」

由里「そうなの。2人で行くんだよ。本当は
行きたくないんだけどさ、お母さんに頭下
げられたから」

三井「そうなんだ」

由里「ねえ、一緒に来てよ」

三井「無理無理。俺、嫌われてるし」

由里「私なんかもっと嫌われてるよ・・・」

三井「次に挨拶行く時は、ご両親に認めても

らう。こいつだったら任せてもいいって思
わせるから、だから今日は由里が頑張って」

由里、三井の両頬をつねる。

三井「痛い、痛い」

由里、手を離す。

由里「じゃあ今日は私が頑張る」

三井「うん」

由里「もう一回つねっていい？」

三井「ダメ」

○倉本家・リビング（夕）

紗江、手紙を書いている。

テーブルには絵本。

そこに一造が入ってくる。

紗江、急いで手紙を絵本に隠し、読ん
でいるふりをする。

一造「じゃあ行ってくる」

紗江「はい」

一造、絵本を見る。

一造「また読み聞かせに行くのか？」

紗江「ええ」

一造「土曜日だったか？」

紗江「はい」

一造「前の日だぞ」

紗江「子供たちが楽しみにしてくれてるんです。って言っても2人しかいないんですけど。でも嬉しいんです。こんなおばあちゃん、の読み聞かせを笑顔で待っていてくれるんですから。その笑顔からたくさんのものを貰いました。読み聞かせしか出来ませんが、最後の恩返しです」

一造「・・・そうか。じゃあ行ってくる」

紗江「はい」

一造、リビングを出る。

○大衆居酒屋（夜）

店内には数名の客。

一造、落ち着かない様子で席に着いている。

松岡の声「いらっしゃいませ」

入口に目を向けると由里が店内に入っ
てくる。

由里、店内を見渡し一造を見つける。

× × ×

テーブルには空のグラスがいくつか置
かれており、焼き鳥とだし巻き卵が並
んでいる。

由里、ジョッキを強めに置く。

由里「何でお父さんはそんなに頭が固いの」

一造「父親に向かって頭が固いとは何だ」

由里「固いじゃない。カッチカッチのカッチ

カッチ」

一造「誰がカッチカッチのカッチカッチだ。

カッチカッチのカッチカッチはお前だろ」

由里「私のどこがカッチカッチのカッチカッ

チなのよ。カッチカッチのカッチカッチは

お父さんみたいな人のことを言うの」

一造「カッチカッチのカッチカッチのカッチ

カッチはお前だろ。何で分からない。鶏が

先に決まってるだろ」

由里「卵が先に決まってるでしょ。どうやって産まれるのよ」

一造「それはだな・・・」

松岡、2人の席に来る。

松岡「もう少しお静かにお願いします。他のお客様もいらっしゃいますので」

由里「すいません。静かにします」

松岡、空のグラスを持って立ち去る。

由里「お父さんのせいで怒られたじゃん」

一造「お前のせいだろ」

由里「そっちが大きな声出すからでしょ」

一造「お前が先に出したんだろ」

由里「私じゃない、そっちが先」

一造「そもそも、お前が鶏と卵どっちが先だ
と思うって聞いてきたからだろ」

由里「だって何も喋らないじゃない」

一造「だからってそんな下らない質問するな」

由里「そんな下らない質問で熱くなったのは

誰よ」

一造「熱くなんかなくてない。お前が1人で

騒いでたんだろ」

由里「それはそっちでしょ。勝手にヒートアップしたから私もヒートアップしたの」

一造「お前がヒートアップしたから俺もヒートアップしたんだ。そしたらお前がさらにヒートアップして、だから俺もヒートアップしてだな」

由里「お父さんがヒートアップしたから、私がヒートアップしたの。私がヒートアップしたからお父さんがヒートアップしたわけじゃない、私がヒートアップしたのは・・・」

松岡の声「うるさい！」

松岡、来る。

松岡「これ以上ヒートアップするなら外でヒートアップしてくれ。何でそんな下らないことでヒートアップするんだよ。ヒートアップするなら、もっといいヒートアップの仕方があるだろ。いいか、ヒートアップって言うのはな・・・」

○歩道橋（夜）

由里、一造の3歩後ろを歩いている。

由里「お父さんのせいで追い出されたじゃん」

一造「お前だろ」

由里「お父さんと居て、楽しかった思い出なんて1つもないよ」

一造、振り返る。

由里「もっと父親らしいことやってよ」

一造「ここまでちゃんと育ててきただろ。お前がやりたいって言ったら習い事だってやらせた。大学だって行かせた。父親らしいことしてきただろ」

由里「それは感謝してる。でも、休みの日に一緒に遊んだり、冗談とか言って笑いあつて、学校や会社の愚痴をこぼしたりする。そういうことがしたかったの。小さい頃からずっとだよ。遊ぼうって言葉すら言えなかった」

一造「・・・」

由里「お父さんがお金出してくれなかったら、

大学も行けなかったし、今の会社にも就職
できなかった。でも、子供が親に求めている
のはそういうことだけじゃないんだよ」

一造「・・・」

由里「コンビニ行ってくるから、先帰ってて」

由里、立ち去る。

一造、立ち尽くす。

○倉本家・リビング（夜）

紗江、カレンダーを見てる。

リビングの扉が開くと、一造が入って
くる。

紗江「おかえりなさい」

一造、上着を脱ぎ椅子に座る。

紗江「どうでした？」

紗江、椅子に座る。

一造「今まで親としての責任は果たしてきた
つもりだったが表面だけだった。父親失格
だな」

紗江「お父さんはちゃんと親の責任を果たし

てきました。これ以上やったら、私のすることがなくなっちゃいます。いつか由里も分かってくれますよ」

一造「なあ」

紗江「何です？」

一造「明日、由里の結婚相手を持って来てもらおう」

紗江「明日ですか？由里に聞いてみますけど」

一造「頼む」

一造、リビングを出て行く。

○同・玄関前（夜）

由里、家に入りずらそうにしている。

着信が入り、電話に出る。

由里「もしもし？」

紗江の声「今どこ？」

由里「家の前」

紗江の声「ちょっと待ってて」

電話が切れる。

少しして紗江が出てくる。

紗江「散歩しよう」

由里「？」

○並木道（夜）

紗江と由里、歩いている。

由里「それでね、お店から追い出されたの。

もうほんと最悪」

紗江「由里」

由里「何？」

紗江「もし私が死んじゃっても、お父さんと
会ってあげてね」

由里「どうしたの急に」

紗江「もしもの話」

由里「やめてよ、縁起でもない」

紗江「お父さんああいう性格でしょ。だから
中々理解してもらえない所がある。せめて
家族だけには分かってもらいたいの」

由里「前から思ってたんだけどさ、何でお父
さんと結婚したの？」

紗江「不器用で真面目で、人付き合いが苦手、

とても厳格な人だった。でもね、優しいところもあるの。その優しさは私だけが知っていた。だからかな」

由里「うーん、私には分からない」

紗江「人それぞれでしょ。好きになる理由って」

由里「まあ確かに」

紗江「そうだ、お父さんが明日ね、三井さん連れて来てだって」

由里「明日？聞いてみるけど・・・」

紗江「お願い」

由里「うん」

○アパート・桜の部屋（夜）

桜、オルゴールを聞いている。

オルゴールの音が止まり、しばらく眺めた後、蓋を閉じる。

○晃央大学までの道

T「金曜日」

拓也、歩いている。

桜の声「あ の ・ ・ 」

拓也、振り返ると桜がいる。

桜「オルゴールありがとうございました」

拓也「うん」

桜「すごく良かったです」

拓也「今日だけ？ プラネタリウムの閉館日」

桜「はい」

拓也「行くの？」

桜「バイトが終わったら行こうと思います」

拓也「そっか」

○二谷商事・男子トイレ前

三井、トイレから出てくる。

由里「わっ」

由里、三井を驚かす。

三井「（驚いて）何？」

由里「今日の夜だからね」

三井「大丈夫かな ・ ・ 」

由里、三井の肩をグーで殴る。

三井「痛っ」

由里「大丈夫。私が選んだ人なんだから」
三井「うん」

○ビル・屋上

神使、街並みを見下ろしている。

後ろから女神使が来る。

女神使「どう？地上の仕事は？」

神使「退屈だよ。まあ神様の世話するよりか

はだいぶましかけど」

女神使「そうだ、神様がどこにいるか知って

る？みんな探し回ってるんだけど」

神使「地上に降りてんだろ」

女神使「こっち来てるの？」

神使「たまにこっち来て人間と戯れてんだよ、

あのじじい」

女神使「まったく、あの方は・・そういうえば、

あんたが担当した人間、明日が最後だろ」

神使「いや、明後日」

女神使「いつ宣告した？」

神使「日曜」

女神使「そしたら土曜日が最後」

神使「じじいが日曜って言ってたぞ」

女神使「確かに日曜なんだけど、日付が変わると同時に命が尽きる。つまり日曜の午前0時がその人間のリミット。だから実質土曜日が最後の日」

神使「あのじじい・・・」

女神使「伝えるか伝えないかは、あなたの自由。日曜ってのは間違っていないからね。まあ好きにしなよ」

女神使、立ち去る。

神使、考え込む。

○並木道

一造と紗江、歩いている。

紗江「もう見れないんですね、ここの桜も」

一造、思いつめた表情。

紗江「そんな顔しないで下さい。今日入れたらあと3日もあるんですから。最後までお

父さんらしくいて下さい」

一造「ああ」

神使の声「よう」

振り返ると神使。

一造「お前」

神使「言いづらいんだけどさ・・・」

× × ×

一造「どういうことだ！日曜が最後だって言
っただろ」

神使「俺の勘違いだった」

一造、神使の胸倉を掴む。

一造「お前にとってはたった1日でも、俺た
ちにとっては限られた1日なんだ。それを
勘違いだと？そんなに軽いもんじゃないだ
ろ、人の命は」

神使「・・・」

一造、その場に膝をつく。

一造「俺の命でも何でもくれてやる。だから
母さんを連れてかないでくれ。今まで母さ
んには苦勞をかけてきた。こんな俺の為に

尽くしてくれた。なのに何で母さんなんだ。
俺でいいだろ。頼む、もう少しだけ一緒に
いさせてくれ」

神使「悪いけど、決められた運命には抗えな
い」

紗江、一造を見ている。

○倉本家・リビング（夕）

一造と紗江、向き合って座っている。

一造、憂鬱な表情を浮かべている。

紗江「この後三井さんが来るんですから、明
るく迎えましょう」

一造「今日はやめにしよう。そんな気分じゃ
ない」

紗江「ダメです」

一造、紗江を見る。

紗江「明日死んじゃうんです私。拓也だって
いつかはここを出て行きます。そしたらお
父さん1人になっちゃうんですよ。そんな
の嫌なんです。だから私が死ぬ前に由里と

向き合って下さい」

一造「・・・分かった」

紗江「それに2つ目の願いが叶わないと、3

つ目をお願いできないじゃないですか」

一造「そうだな」

○本屋（夜）

桜、本の整理をしている。

そこに安本がやってくる。

安本「川口さん」

桜「はい」

安本「申し訳ないんですけど、今日残業できる」

桜「残業ですか？」

安本「ほら、今話題のカリー・クッターと健

ちゃんの肘。明日店頭に並べないといけな

いからさ、ちよつとでいいから出来ないか

な？この通り」

安本、手を合わせお願いする。

桜「・・・分かりました」

安本「ありがとう、助かるよ」

安本、立ち去る。

桜、不安そうな表情を浮かべる。

○住宅街（夜）

由里と三井、歩いている。

三井、強張った表情。

由里「顔、怖いよ」

三井「そう？」

由里「今から戦に行く武将みたい」

三井「戦みたいなものだから」

由里「考えすぎ。もっとリラックスして」

三井「うん」

○倉本家・リビング（夜）

一造と紗江、隣り合わせで座っている。

一造、強張った表情。

紗江「お父さん、顔怖いですよ」

一造「そうか？」

紗江「今から戦に挑む武将みたいです」

一造「どういうことだ」

紗江「もっとリラックスして下さい」

一造「ああ」

チャイムが鳴る。

紗江「来ましたね」

○同・玄関・外（夜）

由里と三井、玄関の前に立っている。

ドアが開き、紗江が出てくる。

紗江「お待ちしました」

三井「お邪魔させて申し上げます」

由里「どこの人？」

○同・リビング（夜）

一造、強張った表情で座っている。

リビングの扉が開き、紗江、由里、三

井が入ってくる。

三井、強張った表情。

紗江「お父さん来られましたよ」

一造、三井を見る。

三井、一瞬固まる。

由里「伸二」

三井「え？あつ、うん」

紗江「お掛けになってください」

紗江と由里、椅子に座る。

三井、その場に立っている。

由里「伸二、座りなよ」

三井、覚悟を決め

三井「この間は大変申し訳ありませんでした。

再度自己紹介させていただきます。私、由里さんとお付き合ひさせていたただいており、まず三井伸二と申します。この度はご自宅にお招きいただきましてありがとうございます。まず。先日伺った日から、どう挨拶したらいいか考えてきました。でも正直全く分かりませんでした。だから飾らずに自分の言葉で言わせていただきます」

三井、一造の前行き正座して床に手をつく。

三井「自分は頼りないし、かつこ悪いところばかりで、由里さんからしたら自慢できる

彼氏じゃないと思います。でも、こんな取り柄も何もない僕を彼女は選んでくれました。私ができることは由里さんに後悔させないことです。僕たちが歳を取って、顔中皺だらけになった時、この人で良かった。そう言ってもらえるような人間になります。男が一度決めたことだから、この言葉に二言はありません。だから・由里さんと結婚させて頂くことをご了承下さい。お願いします」

三井、頭を下げる。

一造、椅子から立ち上がると、床に手をついて頭を下げる。

三井、一造を見る。

由里、驚いた表情。

一造「こんな娘ですが、よろしく願います。娘を幸せにしてやって下さい」

三井、頭を下げ

三井「はい。必ず幸せにします」

紗江、一造を見て微笑む。

○駅までの道（夜）

由里と三井、歩いている。

由里「あのお父さんが頭下げるなんて、考えられない」

三井「何はともあれ、認めてくれたんだからそれでいいでしょ」

由里、三井の頬をつねる。

三井「痛い、痛い」

由里「調子に乗るな」

三井「ごめん」

由里、手を離す。

由里「でもかっこよかった」

三井「ほんと？」

由里、三井の背中に乗る。

由里「駅まで走れ」

三井「マジ？」

由里「マジ」

三井「よーし」

由里「行けー」

三井、走る。

○カフェ・外観（夜）

カフェの入口から拓也が出てくる。

拓也「お疲れさまでした」

多田の声「お疲れ」

拓也、腕時計を見る。

○プラネタリウム・正面玄関（夜）

拓也、上映時間が書いてある看板を見ている。腕時計を見ると最終上映が終わる5分前。

拓也、帰ろうとすると桜が走ってくる。

拓也「どうしたの？」

桜「え？あっ、こんばんは」

拓也「あと5分で終わるみたいだけど」

桜「そうですか・・最後にもう一度だけ見たかったですけど、しょうがないですよね」

桜、苦笑いを浮かべる。

拓也、桜の手を取り

拓也「行こう」

桜、戸惑いながら拓也に連れて行かれ

る。

○同・待合室（夜）

数名の客が場内から出てくる。

拓也、館長に頭を下げている。

桜、拓也の後ろに立っている。

拓也「お願いします」

館長「でもね・・・」

拓也、頭を上げる。

拓也「実は俺、もうすぐ入院しなきゃいけないんです」

桜、驚いた表情。

拓也「だから最後にもう一度見たくて・・・無理を承知なのは分かっていますが、どうかお願いします」

拓也、再び頭を下げる。

桜、拓也に合わせ頭を下げる。

館長「少年」

拓也、顔を上げると館長に抱きしめられる。

館長「諦めるな少年。病気なんかには負けちゃだめだ。俺もここを始めた時はそれはもう大変でな・・・」

拓也「あの、離してもらっていいですか？」

館長、拓也から体を離す。

館長「ごめん、ごめん。じゃあ準備するから待ってて」

拓也「ありがとうございます」

館長、桜を見て

館長「彼氏、大事にしてあげてね」

桜「彼氏？」

館長「違うの？」

拓也「そうです。ね？」

拓也、桜の手を握る。

桜「えっ、はい。うん」

拓也「行こう」

拓也、桜の手を握り場内に入っていく。

○同・場内（夜）

拓也と桜、手を繋ぎながら入ってくる。

桜、緊張した面持ち。

拓也、手を離す。

桜「入院するんですね」

拓也「あれ嘘」

桜「嘘だったんですか？」

拓也「悪いな、変な嘘に付き合わせて」

桜「いえ、私のせいで嘘つかせてしまっ
てごめんなさい」

2人、一番前に座る。

桜「館長さんには申し訳なかつたです。もの
すごく信じてました」

拓也「あんなに信じるとは思わなかつた」

桜「母が生きてる時に言ってたんです。嘘を
つかずに生きなさい。そしたら神様がちゃ
んと見ててくれるからって。だけど守れな
かつたです。きつとバチが当たります」

拓也「悪い」

桜「あっ、そういう意味じゃないです。私の
せいですから。バチが当たるとしても私が
2人分当たるので心配しないで下さい」

拓也「その時は俺も当たるよ」

桜「倉本さんは大丈夫ですよ。これも母が言
ってたんですけれど、嘘には白い嘘と黒い嘘
の2種類があるみたいなんです。白い嘘は
人の為、黒い嘘は自分の為につく嘘なんで
すって。だから嘘をつくときは白い嘘をつ
きなさい。それが母の最期の言葉でした。
私の為についた嘘ですから、倉本さんには
バチは当たりません」

拓也「じゃあ小泉にも当たらないよ」

桜、拓也を見る。

拓也「あそこで嘘ですって言ったら、俺が怒
られてただろ。俺の為に合わせたわけだか
ら、白い嘘だよ」

桜「そうなるんですかね・・・」

拓也「俺が決めた」

桜「神様じゃないのに」

拓也「今は俺が決める」

桜「授業もろくに聞いてないのに」

拓也「それは関係ないだろ」

場内が暗くなる。

桜「始まりますね」

上映が始まり、スクリーンには星が映しだされる。

桜「綺麗ですね」

拓也「うん」

スクリーンには数々の星が写し出されていく。

拓也M「映し出された星はほとんど覚えていなかった。彼女が何を思って観ているのか、それが気になっていた」

拓也、桜を見る。

拓也M「初めてかもしれない。人の気持ちを知らりたいと思ったのは」

○川沿いの道（夜）

拓也と桜、歩いている。

桜「今日がありますがとうございました」

拓也「寂しくなるな。思い出の場所が無くなる」と

桜「はい。でもこれで良かったのかもしれない。ずっと思い出にすぎるわけにはいきませんから。もしかしたら母が先へ進みなさいって言うてるのかもしれない」

拓也「どんなお母さんだったの？」

桜「優しい人でした。私の前では絶対に弱音を吐かないんです。自分は二の次で、辛くても無理ばかりして、大丈夫が口癖でした。私の為に頑張ってる姿を見てて、苦しかった時もあります。でも・・そんな母が大好きでした」

拓也「・・・」

桜「亡くなる前の日に白い嘘と黒い嘘の話をしてくれました。今思うと、母は死ぬことを分かっていたのかなって。限られた時間の中でどう生きるか、私にそれを教えようとしてたんだと思います」

拓也、空を見上げると星空が広がっている。
いる。

拓也「星ってさ、夜だけその姿を映す。限ら

れた時間の中で見るから、綺麗なのかもな」
桜「もし人に永遠の命が与えられていたら、
時間の価値が無くなってしまふ。学校や仕
事、若いこともずっとは続かない。与えら
れた時間があるから目的を作り、それが生
きる意味に変わっていく。どんなに素晴ら
しい音色でも、鳴り続ければ雑音に変わっ
てしまふ。終わりがあから美しくいられ
る」

拓也、桜を見てる。
すると桜が拓也を見る。

桜「倉本さんて意外とロマンチストなんで
ね」

拓也「そんなんじゃねーよ」

桜「照れなくてもいいですよ。恥ずかしいこ
とじゃないです」

拓也「照れてねーから」

桜「顔赤いですよ」

拓也「赤くねーよ」

桜「トマトみたい」

拓也「うるせー、帰るぞ」

桜「はい」

2人、歩き出す。

○倉本家・リビング（夜）

一造と紗江、向かい合って座っている。

紗江「明日ですね」

一造「・・・」

紗江「あっという間でした。普段は思わなかったけど、1日がこんなに大切だなんて初めて知りました。神使さんの言う通りですね。人は犠牲が無いと気づかない。確かにそうかもしれません」

一造「・・・明日、家族全員で出掛けないか？」

紗江「いいですね。しばらく行ってなかったですし、2人には私から話してみます」

一造「頼む」

○走る車内（朝）

T「最終日」

運転する一造。助手席には紗江。

後部座席には拓也と由里。

由里「ねえ、どこ行くの？」

紗江「行ってからのお楽しみ」

由里「何それ」

紗江「フフ」

由里「ねえ、どこだと思う？」

拓也「さあ」

由里「ちよっと、久しぶりに家族で出掛ける
んだから楽しそうにしないよ」

拓也、由里の反対側に顔を背ける。

拓也「寝るから静かにして」

由里「ダメ、しりとりしよう」

拓也「1人でやってろ」

拓也、目を閉じる。

由里「あなたの大好きなお姉ちゃんが一緒に
しりとりしてあげるんだから、起きなさい
よ」

拓也「好きじゃねーよ」

由里「大好きなくせに。素直じゃないんだか

ら」

拓也「黙れババア」

由里「誰が優しく可愛いわアよ」

拓也「可愛いなんて言ってるねーだろ」

由里「拓也の心の声が聞こえてきた」

拓也「あっそ」

拓也、再び目を閉じる。

由里「ねー、しりとりしよう」

拓也「・・・」

由里「りんご」

拓也「ごはん」

由里「ソーパブリッソ」

拓也「ソーパブリッソって何だよ」

由里「今考えた」

紗江、2人のやり取りを楽しそうに聞いている。

○花畑

一造と紗江、一面に広がる菜の花を見ている。

由里、スマホで菜の花を撮っている。

拓也、退屈そうに見ている。

由里「写真撮って」

由里、拓也にスマホを渡し菜の花をバツクにピースサインをする。

拓也、写真を撮りスマホを由里に返す。

由里、スマホを見ると体が半分しか映っていない。

由里「何で半分だけなの」

拓也「邪魔だったから」

由里「私がメインでしょ」

拓也「そういや、変なの映ってた」

由里、スマホを見る。

由里「どこ？」

拓也、去って行く。

由里「ちょっと、結婚前なんだからやめてよ」

由里、拓也を追いかける。

紗江「4人で初めて来たところですね」

一造「ああ」

紗江「拓也は産まれたばかりで覚えてないで

しょうけど」

紗江、由里と拓也を見てる。

紗江「お父さん、ありがとうございます」

一造、紗江を見る。

紗江「また4人で来れるとは思ってなかった
です」

一造「そうだな」

○洋食屋

一造、紗江、由里、拓也、メニューを
見てる。

由里「拓也は何にする？」

拓也「カレー」

由里「子供だね」

拓也「うるせーな」

紗江「由里は何にするの？」

由里「ハンバーグ」

拓也「人のこと言えねーじゃねーか」

由里、店内を見渡すと壁の張り紙に「ン
ーパラリッソ始めました」と書いてあ

る。

由里「ねえ、見て」

由里、張り紙を指差す。

拓也「あんのかよ」

× × ×

テーブルには食べ終わった食器が並んでいる。

由里「美味しかったー、シーパラリッソ」

由里、メニューを手に取り開く。

由里「デザート食べる？」

紗江「私は大丈夫」

由里「タピオカないかな」

拓也「ねーだろ」

一造「（紗江に）タピオカって何だ？」

由里「タピオカも知らないの？」

拓也「親父が知るわけねーだろ」

一造「そのくらい知ってる」

由里「じゃあ何？」

一造「あれだ、ひらったい丸いやつ」

由里「それパンケーキ」

一造、伝票を持ちレジに向かう。

由里「逃げた」

紗江「フフ」

○同・駐車場

一造と拓也、車に乗り込む。

紗江、車に乗ろうとすると由里に呼び止められる。

由里「お母さん」

紗江「何？」

由里「あのね、結婚式でスピーチしてほしいの」

紗江「・・・そういうの苦手だから」

由里「お願い、お母さんなら良いスピーチしてくれそうだから」

紗江「ごめんね・・・私には出来ない」

由里「・・・分かった」

由里、車に乗り込む。

紗江「ごめんね」

○海

一造、紗江、由里、拓也、並んで海を見ている。

由里「海なんて何年ぶりだろ」

紗江「良いですね」

一造「ああ」

由里「何で家族で出掛けようと思ったの？」

一造「・・・」

紗江「由里がもうすぐいなくなるから、最後にみんなで思い出を作りたかったの。今日という日が、この先も家族を繋げてくれる。

・・・だから忘れないでね」

由里「しんみりしないでよ。そういうの苦手なんだから。拓也、近くで見よう」

拓也「1人で行けよ」

由里「行くぞ」

由里、拓也の手を取り海の方に行く。

一造「いいのか、言わなくて」

紗江「ええ。いつもの2人でいてほしいですから。それに、しんみりするのは私も苦手

です」

一造「・・・」

○道・露店前

画家、絵に文字を入れている。

書き終えるのを待っている親子。

画家「はい。お待ちせ」

画家、智也に絵を渡す。

智也、絵を見て嬉しそうな表情。

智也「おじさん、ありがとう」

画家「ああ」

智也「またね」

親子、去って行く。

神使の声「また遊んでんのか」

画家、振り向くと神使が立っている。

画家「お前か」

神使「神様がいないって探してたぞ」

(画家、以降神様と表記)

神様「黙って出て来たからな。ハハハ」

神使「もうちよい神様らしくしろよ。ただの

おっさんじゃねーか」

神様「いいんだよ、ただのおっさんで。神様なんてただの肩書にしかすぎん。ほとんどやつが俺のことを神様って名前で見えてない。神様の肩書が外れりゃ俺もただのおっさんだ。その点こっちはそういう目で見られんからな。気が楽ってもんよ」

神使「それより、死ぬ日の事ちゃんと説明しろよ」

神様「何のことだ？」

○公園

神使と神様、ベンチに座っている。

神様「悪いな。知ってると思ってた」

神使「知らねーよ」

神様「人間と会ってみてどーだ？」

神使「よく分からねーよ。何であんなに生きることにこだわることか」

神様「意味を見つけた人間は先を見るようになる。先を見ると生きようとする。だから

こだわるんだよ。それをもう少し早く気づければ、死ぬことに意味なんていらぬんだがな」

神使「・・・」

神様「それとな、死んだ後に人と人を繋げる人間がいる。死ぬことに意味をつけたが、生き方までは決めてない。どう生きるかで新しい意味が出来たんだろ。それは予想外だった。そんな人間なら死なんて必要ないのかもな」

神使「それが白い嘘しかついてこなかった人間」

神様「そういうわけじゃねーが、真っ直ぐ生きた人間には、最後まで飾らしてやりてえだろ」

神使「なら、死なんか与えなければいいじゃねーか」

神様「悲しいもんでな、そんな人間がこの世から去ることで初めて命の重みを知る。綺麗なもんは、失ってからその価値に気づく」

神使「・・・」

神様「こっちに来るのはな、命に意味を与え
る事が正しいかどうかを確認するためだ。
神様って言っても分からんこともある。み
んなこんなじじいに頼り過ぎなんだよ。生
きる意味ってのは自分で探すもんだ。与え
られるものじゃない」

神使、立ち上がり

神使「生きる意味なんて、俺にはどうでもい
いよ」

と、去って行く。

神様、神使の後姿を見ている。

○図書館・キッズルーム

紗江、絵本を持って座っている。

紗江の前に真奈と隆史が座っている。

離れたところに一造、由里、拓也。

由里「子供の頃、よく読んでもらったよね」

拓也「うん」

由里「今日寝る前に読んでもらったなら」

拓也「ガキじゃあるまい」

紗江「じゃあ、始めますね」

と、絵本を開く。

紗江「むかし、むかしあるところに、おじいさんとおばあさんがいました。おじいさんは・・」

× × ×

紗江「2人は幸せに暮らしました」

紗江、絵本を閉じる。

紗江「真奈ちゃん、隆史君いつも来てくれてありがとうね」

隆史「こいつに無理やり連れてこられただけだから」

真奈「紗江さんが今日で最後だから大勢の方がいいと思って」

隆史「2人しかいねーじゃん」

真奈「英語だったら複数形だもん」

隆史「だから何だよ」

真奈「そうだ紗江さん」

真奈、本棚の後ろから花束を持ってく

る。

真奈「本なんて大っ嫌いだったけど、紗江さんののおかげで好きになった。ありがとう」

真奈、紗江に花束を渡す。

紗江「こちらこそ」

真奈「ほら、たちちゃん」

隆史「短い間だったけど・・・まあ頑張れよ」

紗江「2人ともありがとう」

一造、穏やかな表情で紗江を見ている。

○倉本家・リビング（夜）

一造、紗江、由里、拓也、食卓を囲んでいる。

由里「私も子供が出来たら、読み聞かしてあげよう」

紗江「どんな本読むの？」

由里「北斗の拳」

拓也「寝れねーだろ」

由里「今日読んでた本貸してよ。子供出来たら読ませてあげるから」

紗江「持って行って」

由里「そういえば、お父さんには一回も読んでもらってない」

紗江「一回だけ読んだことありますよね」

由里「ウソ、全然覚えてない。なんの本？」

一造「サルでも分かる経済入門」

由里「分かるか」

一造「何でだ？サルでも分かるんだぞ」

由里「小さい子に聞かせても分かんないですよ」

拓也「後でバナナ買ってこようか」

由里「誰がサルよ。100歩譲ってチンパン

ジーでしょ。って誰がチンパンジーよ」

拓也「自分で言ったんだろ」

紗江、3人のやり取りを見て微笑む。

○同・由里の部屋（夜）

由里、寝ているとドアがノックされる。

紗江の声「起きてる？」

由里、起きない。

ドアがそーっと開き紗江が入ってくる。

由里のそばに行き寝顔を見てると

由里「ちよっと伸二、耳にびっくりハンバー

グ詰めないでよ」

と、寝言を言う。

紗江、由里の顔を見て微笑む。

○同・リビング（夜）

拓也、水を飲んでいる。

そこに紗江が入ってくる。

紗江、拓也を見てると目が合う。

拓也「何？」

紗江「ありがとう。私の子供でいてくれて」

拓也「どうしたの？」

紗江「ううん。言いたくなっただけ」

拓也「・・・そう」

拓也、リビングから出て行く。

紗江、カレンダーを見る。

○同・寝室（夜）

一造、布団の上に座っている。

置時計に目をやると、11時を指している。

襖が開き紗江が入ってくる。

紗江、布団の上に座る。

紗江「やっと家族らしくなってきましたね」

一造「ああ」

紗江「もう少し一緒に居たかったです」

一造「・・・」

紗江「亡くなるって聞いた時は驚きましたけど、十分に生きてしまいういかなかったって受け入れました。でも久しぶりに4人で出掛けて、家族ってこういうことなんだなって思ったら死ぬことが怖くなりました。またみんなを出掛けて、一緒にご飯食べて、くだらないことで笑いあう」

一造「・・・」

紗江「由里と拓也に子供が出来たら家に呼ぶんです。孫と遊んで、おばあちゃんと呼ばれるて、お年玉あげたら嬉しそうにありがと

うって言うってくるんです。夜は絵本を読み聞かせて、そしたらいつの間にか寝ちゃって、その寝顔を見ながら頭を撫でてあげる。もういいって思ったのに。受け入れたつもりなのに、沢山したいことが増えました」

一造「・・・」

紗江、一造の隣に行き一造の肩に頭を乗せる。

紗江「このままいていいですか？」

一造「ああ」

× × ×

時計が11時58分を指す。

紗江、一造の肩に頭を乗せてる。

紗江「もうすぐですね」

一造「・・・」

紗江「お父さん」

一造「何だ？」

紗江「お父さんのこと大っ嫌いです。生まれ変わってもお父さんとは結婚しません」

一造、紗江を見る。

紗江、一造の手を握る。

紗江「最後に嘘ついてみたくて。ちょっとだ

けお父さんのこと困らせてみました」

一造、涙を堪えながら

一造「紗江、死なないでくれ」

紗江「そうできたらいいんですけど」

一造「きつとあいつの勘違いだ。こんな大事

なことなのに、1日間違えるような奴だ。

また違ったって言いに来る」

紗江「そうだといいですね」

一造「そしたらまたみんなで出掛けよう」

紗江「はい」

一造「紗江が行きたいところだったら、どこへ

だって連れてってやる」

紗江「はい」

一造「孫が出来たら俺も一緒に遊ぶ」

紗江「（声が弱くなる）はい」

一造「由里と拓也ともっと話して、必ずいい

家族にする」

紗江「（さらに弱くなる）はい」

紗江、ゆっくりと目を閉じる。

一造「だから、ずっとそばにいてくれ」

紗江「・・・」

一造「紗江・・ありがとう」

時計が12時を指し、秒針が1を通る。

○火葬場（数日後）

火葬炉に棺桶が入って行く。

一造、由里、拓也、三井、数名の親戚が見守っている。

由里、嗚咽をもらし三井の肩に顔を埋める。

火葬が始まり、火葬炉を見る一造。

○倉本家・リビング（夜）

一造、由里、拓也、座っている。

重たい空気が流れている。

一造「少し散歩してくる」

拓也「俺も行くよ」

○並木道（夜）

一造と拓也、歩いている。

拓也「なあ親父」

一造「何だ？」

拓也「結婚してよかった？」

一造「どうした急に」

拓也「なんとなく」

一造「結婚しても色んなものに縛られるだけで、俺にとっては必要のないものだった。」

そんな時に母さんと出会ってな、自分の人生を懸けたいと思える人だった」

拓也「もう一個聞いていい？」

一造「何だ？」

拓也「親父って真面目じゃん。他の人に目移りしたことあんのかなって」

一造「一度も無い。俺は人を笑わせたり、楽しませることは出来ない。きっと俺よりも母さんを幸せに出来る人間は沢山いる。自分がやれることと言えば、裏切らないこと、そして悲しませないこと。これなら出来る

と思った」

拓也「・・・」

一造「1人の人間にどれだけ捧げられるか、それが男の度量になる。お前もいつか見つけろよ。全て懸けられる人を」

拓也「うん」

○倉本家・リビング

T「2年後」

一造、由里、三井、座っている。

一造、赤ん坊を抱いている。

由里「おじいちゃんですよー。ほら、じいじって」

三井「まだ喋らないよ」

由里「分からないじゃない・・・そうか日本語だからか。ほらグラランドファザーですよー」

三井「余計喋らないよ」

由里「ねえ、拓也に結婚式出ろって言っついて。あいつ既読でスルーするのよ」

一造「分かった」

由里「あと拓也の彼女も連れて来てね。紹介しろって言ってもやだって言うから」

一造「ああ」

由里、仏壇の紗江の写真を見る。

由里「お母さんにも来てほしかつたな・・・」

一造「・・・」

由里「そうだ、お母さんの絵本持っていったいいい？」

一造「ああ」

○同・寝室

由里、入ってくる。

本棚から絵本を探す。

絵本を見つけページめ捲っていくと、中から手紙が出てくる。

○同・リビング

一造と三井、赤ん坊をあやしている。そこに由里が入ってくる。

由里「じゃあ、絵本持っていくね」

由里、涙目になっている。

一造「何で泣いてるんだ？」

由里「目擦ってたら指入っちゃって」

三井「大丈夫？」

由里「うん。じゃあお父さん結婚式で」

一造、三井に赤ん坊を渡す。

三井「お邪魔しました」

一造「ああ」

由里と三井、リビングから出ていく。

一造、仏壇の紗江の写真を手取る。

○結婚式場

友人代表がマイクの前に立ち乾杯の音頭をとる。

友人「乾杯」

×

×

×

参加者たちが由里と三井の所に集まって談笑している。

一造、拓也、桜、席に着いている。

桜「なんか緊張するね」

拓也「そう？」

桜「あんまり慣れてないから、こういう場所」

拓也「お前もいつかするんだから、こっち側で緊張してたら出来ないぞ」

桜「え？もうヤダ」

桜、恥ずかしながら拓也の肩を思いつきり叩く。

拓也「痛った」

一造、2人のやり取りを見て微笑む。

× × ×

由里と三井、お色直しの為退場している。

司会者「皆様、ご歓談中ではございますが、ここで少しお時間を頂きまして、祝電をご披露させていただきます」

司会者、電報を取り読みあげる。

司会者「ご結婚おめでとうございます。色んな困難があっても、お二人なら乗り越えて行けると思います。この先が素晴らしい未来でありますようお祈りいたします。全日

本ノーパラリッソ協会一同」

拓也「協会まであんの」

桜「ノーパラリッソって何？」

拓也「お前にはまだ早い」

桜「？」

×

×

×

由里と三井、キャンドルサービスで各
テーブルを回っている。

桜「何て挨拶したらいい？」

拓也「おす、オラ桜」

桜「丸い玉7つ集めてる人って思われる」

由里と三井、一造たちのテーブルにや
って来る。

由里「拓也の彼女？」

桜「はい。小泉桜です」

由里「可愛い。拓也にはもったいない」

拓也「うるせーな」

由里「今度、家遊びに来てね」

桜「はい」

拓也「早く行けよ」

由里、自慢げにドレスを見せる。

由里「ドレス綺麗でしょ？」

拓也「普通」

由里「普通って何よ。野球で言ったら何割何

打点何本塁打よ？」

拓也「何で野球何だよ」

由里、一造を見る。

由里「お父さんどう？」

一造「似合ってる」

由里「でしょ」

三井「そろそろ行こ」

由里「じゃあ楽しんで」

由里と三井、立ち去る。

桜「すごい綺麗」

拓也「そうか」

桜「綺麗だよ」

一造、由里の後姿を見ている。

× × ×

司会者「ここで、新婦からご挨拶がござい
ます。それではお願い致します」

由里、立ち上がる。

由里「本日はご多用のところ、披露宴にご列席いただきありがとうございます。私事ではございますが、父に私の想いを伝えさせていただきます」

由里、一造を見る。

由里「お父さんとはずっと喧嘩ばかりだったね。お互い背中向けて、振り返ることなく、違う道を歩んでいくんだと思ってた。2人で飲みに行った日、私の気持ち話したでしょ。あの時に初めてお父さんと向き合えた気がする。4人で出掛けた日、これが家族なんだなって思えた。今まで言えなかったけど、こんな私をここまで育ててくれて、お父さんの娘にしてくれて本当にありがとう」

一造、由里を見ている。

由里「あとね、お母さんの絵本の中に手紙が入ってたの。読むね」

一造、驚いた様子で由里を見ている。

由里、手紙を取り出す。

由里「由里、結婚おめでとう。あなたが素敵な人と出会い、共に生きていくことを幸せに思います」

○回想・倉本家・リビング

紗江、手紙を書いている。

紗江の声「この先、辛いことや苦しいことがあると思います。そんな時は心に余裕がなくなり相手に当たってしまう時もあるでしょう。だけど・・・」

○回想・ファミレス

由里、三井の頬をつねっている。

紗江の声「思いやる気持ちを持ち続けて下さい。ありがとう、ごめん、こんな些細な当たり前が家族を支えてくれます」

○回想・駅までの道（夜）

三井、由里をおんぶして走っている。

紗江の声「そのことを覚えていて下さい。優しさを忘れないでいられるから」

○回想・倉本家・リビング（夜）

三井、一造に頭を下げている。

紗江の声「結婚とは、自分が2番目になるということです。隣にいる人があなたを1番にしてください」

○結婚式場

三井、由里を見ている。

由里「それと2人は照屋さんだから、これは由里から伝えて下さい」

拓也、由里を見ている。

由里「いつかあなたにも、心に決めた人ができると思います。もしかしたらもう隣にいるかもしれない」

○回想・プラネタリウム（夜）

拓也と桜、プラネタリウムを見ている。

紗江の声「その時は受け取るのではなく、与えることを考えて下さい。愛されてると感じれば、不安を包んでくれるから」

○回想・川沿いの道（夜）

拓也と桜、歩いている。

紗江の声「隣に居ても孤独を感じる時があると思います。それはきっと心が離れているから。だから安心させてあげて下さい。どんな形でもいいから証が欲しいのです」

○結婚式場

拓也、由里の方を見ながら桜の手を握る。

桜、拓也を見る。

由里「最後にお父さん。お父さんには1つだけです。私と居たこと忘れないで下さい。これが3つ目の願いです」

一造、涙を流す。

由里「みんなが幸せになれることを、心から

願っています」

温かい拍手が会場を包む。

○並木道

T 「3年後」

桜の木が満開となっている。

由里と三井、子供と手を繋いでいる。

その後ろから拓也と桜が歩いている。

桜、赤ん坊を抱いている。

一番後ろには一造が歩いている。

由里 「みんなで写真撮ろう」

由里、スマホを取り出す。

由里 「並んで」

桜の木をバックに並ぶ。

由里、スマホを構えると

神使の声 「撮りましょうか？」

振り向くと神使が立っている。

一造、神使を見てる。

由里 「いいんですか？じゃあお願いします」

神使にスマホを渡し、みんなのところに

駆け寄る。

神使「撮りますね。はいチーズ」

撮り終わると由里が神使の所に駆け寄る。

神使、由里にスマホを渡す。

由里「ありがとうございます」

由里、みんなの所へ戻り、写真を見せながら歩いていく。

由里「あの人いつからいた？」

三井「そういえばそうだね」

一造、神使の所に歩いて来る。

神使「まだ言っていないの？」

一造「ああ」

神使「今日が最後だけど」

一造、由里たちの後姿を見ている。

一造「言うつもりはない。いつもと変わらずに終わらせたい」

神使「まあ、あなたの好きにしたらいいよ」

一造「でもいいのか？俺に伝えて」

神使「1日間違ったからそのお詫び」

一造「なあ、俺の命の意味って何だったんだ？」

神使「そこまでは分からない。でも今のあんたなら、生きていくことに意味がある気がする」

一造「変わったなお前」

神使「変わってねーよ」

由里の声「お父さん！舞がぐずっちゃった」

由里、遠くから大声で叫ぶ。

一造「じゃあもう行く」

神使「ああ」

一造と神使、反対方向に歩いていく。

神使、立ち止まり桜を見る。

振り返り一造たちを見ると、みんな

楽しそうに歩いている。

神使、再び歩き始める。

E
N
D